

利休百首

茶の心について

- ・ その道に入らんと思ふ心こそ 我身ながらの師匠なりけり
- ・ ならいつゝ見てこそ習へ習わずに よしあしいうは愚なりけり
- ・ こゝろざし深き人にはいくたびも あはれみ深く奥ぞ教ふる
- ・ はぢをすて人に物とひ習ふべし 是ぞ上手の基なりける
- ・ 上手にはすぎと器用と功績むと この三つそろふ人ぞよくしる
- ・ 茶の湯をば心に染めて眼にかけず 耳をひそめてきくこともなし
- ・ もとよりもなきいにしへの法なれど 今ぞ極る本来の法
- ・ 規矩作法守りつくして破るとも 離るゝとても本を忘るな
- ・ 眼にも見よ耳にもふれよ香を嗅ぎて ことを問ひつゝよく合点せよ
- ・ 習ひをばばちりあくたぞと思へかし 書物は反古腰張にせよ

点前について

- ・ 点前には弱みを捨てゝただ強く されど風俗いやしきを去れ
- ・ 点前には強みばかりを思ふなよ 強きは弱く軽く重かれ
- ・ 何にても道具扱ふたびごとに 取る手は軽く置く手重かれ
- ・ 何にても置き付けかけはる手離れは 恋しき人にわかるゝと知れ
- ・ 点前こそ薄茶にあると聞くものを そまつになせし人はあやまり
- ・ 濃茶には点前をすてゝ一筋に 服の加減といきをちらすな
- ・ 濃茶には湯加減あつく服はなほ 泡なきやうにかたまりもなく
- ・ とにかくに服の加減を覚ゆるは 濃茶たびゝ点てゝよく知れ
- ・ よそにては茶を汲みて後茶杓にて 茶碗のふちを心して打て
- ・ 時ならず客の来らば点前をば 心は草にわざをつゝしめ
- ・ 風炉濃茶必ず水さすと 一筋に思ふ人はあやまり
- ・ 右手を扱ふ時はわが心 左の方にあるとしるべし
- ・ 一点前点るうちには善悪と 有無の心のわかちをも知る
- ・ なまるとは手つゞき早く又おそく ところゞのそろはぬをいふ
- ・ 茶入より茶を掬ふには心得て 初中後すくへそれが秘事なり

- ・ 茶を振るは手先をふると思ふなよ 臂よりふれよそれが秘事なり
- ・ 茶を点てば茶筌に心よくつけて 茶碗の底へ強くあたるな
- ・ 点前には重きを軽き軽きをば 重く扱ふ味ひをしれ
- ・ 稽古とは一より習ひ十を知り 十よりかへるもとのその一
- ・ 茶の湯とはたゞ湯をわかし茶をたてゝ のむばかりなる事と知るべし
- ・ 名碗の茶碗出でたる茶の湯には 少し心得かはるとぞ知れ

道具について

- ・ 中次は胴を横手にかきて取れ 茶杓は直におくものぞかし
- ・ 棗には蓋半月に手をかけて 茶杓を円く置くとこそしれ
- ・ 薄茶入蒔絵彫もの文字あらば 順逆覚え扱ふとしれ
- ・ 肩衝は中次とまた同じこと 底に指をばかけぬとぞ知る
- ・ 分琳や茄子丸壺大海は 底に指をばかけてこそ持て
- ・ 大海をあしらふ時は大指を 肩にかけるぞ習ひなりける
- ・ 口ひろき茶入の茶をば扱むといひ 狭き口をばすくふとぞいふ
- ・ 筒茶碗深き底よりあがりふき 重ねて内へ手をやらぬもの
- ・ 乾きたる茶巾使はゞ湯をすこし こぼり残してあしらふぞよき
- ・ 茶巾をば長み布はば一尺に 横は五寸のかねざしとしれ
- ・ 帛紗をば豎は九寸余よこ巾は 八寸八分かねざしにせよ
- ・ 品々の釜によつての名は多し 釜の総名罐子とぞいふ
- ・ 冬の釜圍炉裏より六七分 高くすゑるぞ習ひなりける
- ・ 姥口は圍炉裏ふちより六七分 低くすゑるぞ習ひなりける
- ・ 置き合わせ心をつけて見るぞかし 袋は縫目畳目に置け
- ・ はこびだて水指おくは横畳 二つ割りにてまんなかに置け
- ・ 茶入又茶筌のかねをよくも知れ あとに残る道具目あてに
- ・ 水指に手桶出さば手は横に 前の蓋とりさきに重ねよ
- ・ 釣瓶こそ手は豎におけ蓋取らば 釜に近づく方と知るべし
- ・ 小板にて濃茶を点てば茶巾をば 小板の端におくものぞかし
- ・ 湯を扱まば柄杓に心づきの輪の そこねぬやうに覚悟して扱む

- ・ 柄杓にて湯を汲む時の習には 三つの心得あるものぞかし
- ・ 湯を汲みて茶碗に入るゝ其時の 柄杓のねぢは肱よりぞする
- ・ 柄杓にて白湯と水とを汲むときは 汲むとは思はじ持つと思はじ
- ・ 喚鐘は大と小とに中々に 大と五つの数をうつなり
- ・ 暁は数寄屋のうちも行燈に 夜会などには短檠を置け
- ・ ともしびに陰と陽との二つあり あかつき陰によるは陽なり
- ・ 燈火に油をつがば多くつげ 客にあかざる心得と知れ
- ・ いにしへは名物などの香合へ 直ちにたきもの入れぬとぞきく
- ・ 蓋置に三つ足あらば一つ足 まへにつかふと心得ておけ
- ・ 二疊三疊台の水指は まづ九ツ目に置くが法なり
- ・ 板床に葉茶壺茶入品々を 荘らでかざる法もありけり
- ・ 釜一つあれば茶の湯はなるものを 数の道具をもつは愚な
- ・ かず多くある道具をも押しかくし 無きがまねをする人も愚な
- ・ 水と湯と茶巾茶筌に箸楊枝 柄杓と心あたらしきよし
- ・ 茶はさびて心はあつくもてなせよ 道具はいつも有合にせよ

床について

- ・ 墨蹟をかける時にはたくぼくを 末座の方へ大方はひけ
- ・ 絵の物をかける時にはたくぼくを 印ある方へ引きおくもよし
- ・ 絵掛けものひだり右向きむかふむき 使ふも床の勝手にぞよる
- ・ 掛物の釘打つならば大輪より 九分下げて打て釘も九分なり
- ・ 床にまた和歌の類をばかけるなら 外に歌書をば荘らぬと知れ
- ・ 外題あるものを余所にて見るときは 先ず外題をば見せて披けよ
- ・ 竹釘は皮目を上にうつぞかし 皮目を下になすこともあり
- ・ 三つ釘は中の釘より両脇と 二つわりなるまんなかに打て
- ・ 三幅の軸をかけるは中をかけ 軸さきをかけ次に軸とも
- ・ 掛物をかけて置くには壁付を 三四分すかしくおくことゝきく
- ・ うす板は床かまちより十七目 または十八十九目におけ
- ・ うす板は床の大小また花や 花入によりかはるしなぐ

- ・ 花入の折釘うつは地敷居より 三尺三寸五分余もあり
- ・ 花入に大小あらば見合わせよ かねをはずして打つがかねなり
- ・ 釣舟はくさりの長さ床により 出船入船浮船と知れ
- ・ 壺などを床に飾らん心あらば 花より上にかざりおくべし
- ・ 花見よりかへりの人に茶の湯せば 花鳥の絵をも花も置まじ
- ・ 余所などへ花をおくらば其花は 開きすぎしははやらぬものなり
- ・ 床の上に籠花入を置く時は 薄板などはしかぬものなり
- ・ 掛物や花を拝見する時は 三尺ほどは座をよけてみよ
- ・ 盆石をかざりし時の掛物に 山水などはさしあひとしれ
- ・ いにしへは夜会などには床の内 掛物花はなしとこそきけ
- ・ 茶の湯には梅寒菊に黄葉み落ち 青竹枯木あかつきの霜

炭について

- ・ 炭置きはたとへ習ひにそむくとも 湯のよくたぎる炭は炭なり
- ・ 客になり炭つぐならばそのたびに 薫物などはくべぬことなり
- ・ 炭つがば五徳はさむな十文字 縁をきらすな釣合をみよ
- ・ 焚え残る白炭あらば捨て置きて また余の炭を置くものぞかし
- ・ 崩れたるその白炭をとりあげて 又たきそへることはなきなり
- ・ 炭おくも習ひばかりにかゝはりて 湯のたぎらざる炭は消え炭
- ・ 風炉の炭見ることとはなし見ぬとても 見ぬこそなほも見る心なれ
- ・ 客なりに風炉のその内見る時は 炭崩れなん気づかひをせよ
- ・ 客になり底取るならばいつにても 囲炉裏の角を崩し崩すな
- ・ 羽簾は風炉に右羽よ炉の時は 左羽をば使ふとぞしる
- ・ 炉の内は炭斗瓢柄の火箸 陶器香合ねり香としれ
- ・ 風炉の時炭は菜籠にかね火箸 ぬり香合に白檀をたけ